

# とうほく学生演劇祭3 活動報告書



実施日時 | 2016年9月1日～4日

会場 | せんだい演劇工房10-BOX

とうほく学生演劇祭実行委員会

事務局 中村大地

E-mail | [tstfesta@gmail.com](mailto:tstfesta@gmail.com)

TEL | 080-6730-0669

## 目次

### 1. 事業計画と実績

1-1. 事業目的

1-2. 具体的な実施報告

1-3. 参加団体と作品紹介

1-4. 審査結果について

1-5. テーマ

1-6. 関連企画の実施

### 2. クレジット

## 1. 事業計画と実績

### 1-1. 事業目的

時間や空間などの与えられる条件を同一にしたうえで作品の優劣を争うとうほく学生演劇祭は今年で開催で第3回となる。宮城・山形・岩手・青森の学生団体が参加し、着実にその範囲を広げつつある本事業の、東北における芸術文化の人材の育成、交流をはじめとする振興への期待は大きく、さらに学生が学生時代に自らの意志で創作をし、批評されるということ、また学生が自らの手によって企画を運営・実施するということは、激しく変化する現代社会において主体的な判断を必要とされる若者への教育効果の一面も期待できる。

以上、東北地域における舞台芸術の振興および、未来を担う若者の人材育成という2点を主たる目的とし、本事業を企画する。

### 1-2. 具体的な実施報告

- **本番日程** 2016年9月1日（木）～9月4日（日）  
小屋入り期間 8月28日（日）～9月6日（火）
- **会場** せんだい演劇工房10-BOX（宮城県仙台市若林区卸町2-12-9）  
※ 10-BOX内、box-1を上演会場とし、engawaCafeや、ときのへやなどの企画部屋、控室や荷物置き場などもすべて10-BOX内に用意した。
- **全体スケジュール**

3月上旬	とうほく学生演劇祭実行委員会発足
5月9日	参加団体募集説明会実施 6県7カ所、計○団体○名
5月31日	参加団体募集〆切・上演情報提出
6月5日	参加団体確定
7月18日	公演ビラ配布開始、実行委員会・参加団体全体顔あわせ (場所：東京エレクトロンホールミーティングカルチャールーム)
8月1日	チケット予約開始
8月28日	とうほく学生演劇祭劇場入り
9月1～4日	本番
9月1日	開会式実施
9月3日	アカペラライブ実施
9月4日	審査員アフタートーク実施
9月5日	学生ドラフト会議、審査会、講評会、交流会実施

○ チケット

1stage 500 円 (前売／当日ともに)

1day 1500 円 (前売のみ／ドリンクチケット付き)

○ 集客

延べ 427 名 (全 16 ステージ。)

○ タイムテーブル

※別紙タイムテーブルを参照

○ 審査結果

大賞・審査員賞 該当なし

観客賞 演劇処 A 定食『ノックスの密室』

奨励賞 青森大学演劇団「健康」『雨恋』

俳優賞 岡本雄馬 (青森大学演劇団「健康」)



### 1-3. 参加団体と作品紹介

#### ○ 演劇処 A 定食（宮城）『ノックスの密室』 ※観客賞受賞

作・演出：鈴木あかり

出演：佐藤うらら、赤坂理沙、猪俣巴那、北澤知慧、黒沼義弘、堀野綾女、小田中元美、白田優花、芦野百香

舞台監督：熊谷美咲 音響操作：柳田菜緒 照明操作：森山紗莉

あらすじ

『犯人はあの人です。探偵が容疑者を集めて「さて」と言う前に当てちゃっても構いません。あらすじなんてものがなくても、この謎は解けます。』



#### ○ 青森大学演劇団「健康」（青森）『雨恋』 ※奨励賞、俳優賞受賞

作・演出：村下直光

出演：岡本遊馬、村下直光、吉田彩香

舞台監督：吉田彩香 音響操作：伊藤弘迪 照明操作：相馬正宗

あらすじ

俺の名前は生田暖人。就職をきっかけに青森から上京してきた社会人1年目です。この公園は私もお気に入り、お昼休みによく利用しています。・・・あの、あなたのお名前を聞いてもいいですか・・・？



○ 東北学院大学演劇部（宮城） 『循環』

作・演出：松原大悟

出演：浅野陽色、渡辺瑞生、阿部佳希、岩澤一成

舞台監督：岩澤一成 音響操作：折笠友美 照明操作：吉田百伽 衣装：安齋琴恵

あらすじ

歩いていた。見知らぬ道をも、道とは思えぬ道も、誰も通らなかつた道も、ただひたすらまっすぐ歩いた。行きついた先には、タクシー運転手のような恰好をした青年が待っていた。



○ 新潟国際情報大学演劇部（新潟） 『偽りの自分』

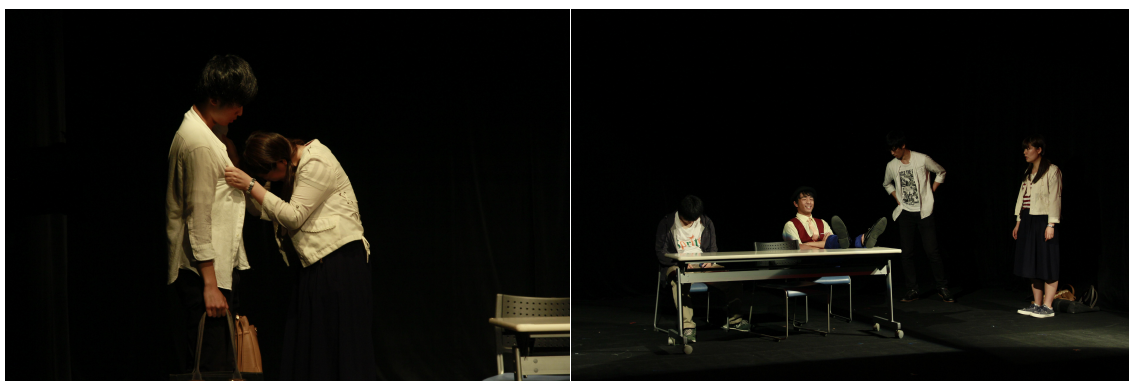
作・演出：菅井悠馬

出演：長島佑輝、永澤彩子、栗山直樹、菅井悠馬

照明操作：宮原百花 音響操作：土田智大 演出補佐：佐藤茉由子

あらすじ

自分を偽り、人との交流を鬱陶しく感じている男。その男の元に、謎の人物が現れ、自分のことを SNS だと名乗る。果たして謎の人物はなぜ、男の前に現れたのか、そして目的は？最後に皆さんに問おう、” 友だち ” とはなんだろうか。



## 1-4. 審査結果について

### ○ とうほく学生演劇祭3ルール

- ☆ 上演時間は1団体 45 分間。
  - ☆ 上演時間を超過する団体はペナルティとして、全国学生演劇祭出場選考の対象から除外される（上演開始、終了のタイミングは小屋入り後テクリハ、ゲネを見て実行委員会で判断し、各団体演出にお知らせいたします）。
  - ☆ 本番の転換では仕込みに 10 分・バラしに 5 分を基本とする。
  - ☆ 上演形態の都合上、舞台効果については以下を原則とする。  
装置・・・舞台図を参照。  
道具・・・転換時間内に収まる且つ、box-5 の指定された範囲で保管できる量  
照明・・・上演及び作品づくりにあたっての説明参照  
音響・・・上演及び作品づくりにあたっての説明参照  
映像・・・プロジェクター/スクリーン有り。  
(ただしプロジェクターは1台、スクリーンは黒布)
- ※音響、照明、映像のオペレーターについては、各参加団体で手配すること。

### ○ 賞与について（事前に団体説明の際に利用した手引きを引用。）

〈団体賞〉

#### ①審査員賞

審査員からの評価が最も高かった団体に与えられます。当賞は、審査員の話し合いによって選出された団体に対して与えられます。

#### ②観客賞

観客からの評価が最も高かった団体に与えられます。当賞は、観客に各団体の上演を 10 点満点で評価してもらい(この点数を「観客点」と呼びます)、その平均点が最も高かった団体に対して与えられます。

#### ③大賞

観客点の平均値を考慮に入れた上で、審査員の話し合いにより大賞が決定されます。大賞を受賞した団体は、来年度に京都で開催される「全国学生演劇祭」への出場権を獲得します。

〈個人賞〉

個々人ですぐれた活躍を見せた参加者に対して与えられる賞です。各賞は審査員の話し合いによって決定されます。

#### ①俳優賞

#### ②脚本賞

#### ③演出家賞

※個人賞の内容は変更される場合があります。

## ○ 審査基準（審査員へ事前に送ったメールの内容を引用。）

まず、本演劇祭は高校演劇とは異なります。審査の際も教育的な配慮などする必要はありません。忌憚のない御意見をいただければとおもいます。また本演劇祭の大賞受賞団体（審査員賞を受賞した団体が該当します）は、2017年2月に開催する、京都ロームシアターで開催される「第二回全国学生演劇祭」への出場権が与えられます。過去二年間、とうほく学生演劇祭で大賞を受賞した2団体はいずれも、夏に上演した作品の再演を全国大会までにブラッシュアップさせて上演しました。その成果には目を見張るものがあり、一年目の東北大学学友会演劇部は審査員賞、観客賞、委員会賞の三冠を達成、二年目のプリンに醤油は、賞こそ受賞できなかったものの高い評価を得ました。本演劇祭の特色は、この「半年後に再演が求められる」というところにあるのではないかと思います。全国大会に送り出すこと（再演）を前提にして、作品がどう変化していくのかという期待をしたくなる団体を、とうほく代表として全国大会に送り出したいと思える団体を、私たちは選出して頂きたいと考えています。

## ○ 審査員紹介

### ☆国久暁（くにひさ あき）

1975年生まれ。岩手県出身。高校時代に盛岡にて「劇団無国籍」を立ち上げ、中心メンバーの一人となる。以来、殆どの作品の演出と、劇中の映像も手がけている。その他、杜の都の演劇祭「東京日記」(08)ではプログラムディレクターとして参加している。劇都仙台2009第11回演劇プロデュース公演「はだか道」に演出として参加した。また、最強の一人芝居フェスティバル [INDEPENDENT] に'10年参戦、「ときどき沼」を上演している。同イベントの地方版 [INDEPENDENT: SND (仙台)] では、'13年に「無敵拳コマツ」'15年に「パノラマ510 (独唱)」でやはり演出として参加している。現在、来年1月の無国籍公演「物騒な踊り場」を製作中。

### ☆赤羽ひろみ（あかはね ひろみ）

1987年生・長野県出身。2006年3月、桜美林大学 総合文化学群演劇専修に入学。在学中はアーツマネジメント、舞台制作を専攻。2009年1月、(有) ゴーチ・ブラザーズ・制作部に所属。制作助手として、故蜷川幸雄、串田和美、河原雅彦らの現場での経験を積む傍ら、2012年以降は、自身の企画するプロジェクトも手掛ける。2015年に退職後、「蛙昇天」（演出：長塚圭史／せんだい演劇工房 10-BOX）の制作部に携わったことをきっかけに、活動拠点を仙台に移す。2016年4月に、自身の活動母体として entoo（読：えんと）を立ち上げ、俳優ユニット さんぴんの仙台滞在創作公演の実施や、人と演劇をつなぐプロジェクト「ENGAWA cafe」を実施し、活動の幅を広げている。

### ☆大河原準介（おおかわら じゅんすけ）

作家、演出家、役者。1981年生まれ、仙台市出身。20歳の時に上京し、お笑いコンビとしてルミネ the よしもとで活動。2002年、桐朋学園芸術短期大学・演劇科演劇専攻に入学。2004年、同大学・専攻科に進学。2006年に修了後、演劇ユニット G.com（主宰・三浦剛）に演出助手として参加。2007年より演劇企画集団 LondonPANDA の作・演出として活動開始。これまでに9本を上演。全作品で作・演出を担当。2015年5月～12月の期間、ロンドンに游学。数々の小劇場に足を運び、世界の演劇を体感して帰国する。2016年より活動拠点を地元仙台に移転。

## ○審査結果について

とうほく学生演劇祭3では、審査員賞該当団体なし、と言う結果に終わり、あわせて第二回全国学生演劇祭への推薦団体もなし、と言う結果になった。このような事態はこれまでなかったため、実行委員会では、9月19日付で下記の学生演劇祭HP上に文章を掲載し、審査への理解を求めた。

### (とうほく学生演劇祭HPより引用)

ご挨拶が遅くなりましたが、9月5日をもって、とうほく学生演劇祭3は無事終了いたしました。宮城から2団体、新潟から1団体、青森から1団体。全16ステージ、延べ427名のお客様にご来場頂きました。ありがとうございました。

さて、今年度のとうほく学生演劇祭3において審査員賞の該当団体はありませんでした。この結果、私たち実行委員会は第2回全国学生演劇祭にとうほく学生演劇祭3から団体を推薦しないという判断を下しました。これについて、今オープンになっている情報以上の説明が必要であると思い、事務局より中村がコメントいたします。一番初めに、この判断は決して後ろ向きなものではなく、むしろ演劇祭や学生演劇の将来の為にを行った判断であって、私たちは来年度以降もとうほく学生演劇祭を続けていく必要があります、続けていきたいと考えているということを述べておきます。

今回の判断にいたった経緯を説明するにあたり、審査員3名（国久暁氏、赤羽ひろみ氏、大河原準介氏）と実行委員会（事務局中村大地、企画村上京央子）で行った審査会の流れを説明します。審査会当初から、「4団体のなかで及第点と言えるような作品を提出したのは青森大学演劇団「健康」の『雨恋』のみである」というように3名の審査員の意見は一致していました。そこからの議論の大部分は、「健康」に大賞を与えるかどうか、に割られました。大賞の位置付けは各地域演劇祭ごとに異なりますが、私たちはこれまで審査員賞を大賞とし、大賞受賞団体を全国学生演劇祭へと送り出してきました。今年度のとうほく学生演劇祭3もその流れをくむものです。加えて今年は新たな“審査基準”を設けました。  
(中略)

こうした基準も加味し「健康」の“伸びしろ”について議論がなされましたが、「もちろん“伸びしろ”はあるけれど、誰か大人が稽古場につきっきりになる、脚本を大きく書き直す、など大がかりな変更がなければ、“とうほくの代表として”全国学生演劇祭に作品を提出するレベルには至らないのではないか。」という声が大きく、全国学生演劇祭へと積極的に推す審査員はいませんでした。その上で、全国学生演劇祭にとうほく学生演劇祭から団体を選出しないことのリスクについて、実行委員、事務局も交えて話し合われました。「全国で出来の悪い上演をし、“ぼこぼこ”にされて帰ってくるというのも今後の彼らのためになるのではないか。」「どのような出来であっても、全国学生演劇祭に出品し続けることが、とうほく学生演劇祭の継続のためなのではないか」という意見も出ましたが、「『全国にでない』という選択をすることで、とうほく学生演劇祭というハードルをあらためて提示することの方が、参加していない団体も含めた東北各地の学生演劇にインパクトを与えやすく、結果的にそれが刺激となって良い効果を生むのではないか」という結論で審査員、実行委員ともにまとまり、審査員賞の該当団体を選出しないことに決定いたしました。この結論には、審査会に立ち会った実行委員、特に事務局長である中村の意見も反映されていることを、言い添えておきます。（後略）

とうほく学生演劇祭実行委員会  
事務局 中村大地

## 1-5. テーマ

本年度は、毎回の学生演劇祭にテーマを設けることを試みた。テーマは実行委員の学生によって考えられ、その後のチラシや、グッズなど広報物のデザインなどにも反映された。

(とうほく学生演劇祭 HP より引用)

「わ。」

私たちとうほく学生演劇祭実行委員会は、ある3つの想いから、今年はこのコンセプトを掲げることにしました。

ひとつ。「祭」を作りたい。

各地から学生たちが作品を持ち寄り、競い合うこのイベント。捉え方によっては「大会」や「コンテスト」と見ることもできます。 けれど私たちは、この「祭」という文字にこだわってみたいと思います。

私たちが場を作り、みなさんが作品を発表する。それだけの場でもいいのかもしれないけれど、せっかくみなさんと私たち、「学生演劇」というある意味同じ村に住む人たちが集うのだから、いっしょにとびっきり熱い空間を作りたい。そのためにいっしょに考えたい。汗をかきたい。

とうほくで盛り上がりたい。そんな想いを「祭」の言葉に集約しました。

ふたつ。きっかけを作りたい。

おもしろい人に出会いたい。おもしろい作品に出会いたい。これはいらっしゃるお客さまはもちろん、私たち実行委員、そして参加するみなさんの共通の願いなのではないでしょうか？

事実、これまでの演劇祭で出会い、できたつながりは今も強く残っているようです。

お互いの作品を見に足を運んだり、いっしょに旅に出たり、なんと相手の劇団で出演しちゃったり…。みて、つくって、つながって、またみて、つくって、つながって。そんなかけがえのないきっかけを作りたいのです。

みつつ。続いて行ってほしい。

今年で第3回を数えるこの「とうほく学生演劇祭」。毎年手作り手探りのお祭りです。まだまだベストな形はわかりません。けれど、手で作ってきたこのお祭りが、意味を持っているということには、少しずつ胸を張れるようになってきました。初めて作品を発表する場。初めましての人と出会う場。初めて評価をもらえる場。初めてこんなに熱くなれる場。

たくさんの初めてと、そこから生まれるたくさんの気持ちを経験できる場として東北の地に根付いていくまで。「3」という数字が反対側にもうひとつついて、∞……まではいかなくても、これから末永く続いていくための基盤になるような年にしたいのです。

ひらがなで「わ。」

どんな文字に変換できるでしょうか？ 輪、和、環、話、ワ…。

どんな記号がくつつくでしょうか？ 「？」だったり「！」だったり…。

どんな形にだって変れるように、そして私たちの想いをシンプルに伝えられるように、ひらがなで「わ。」

まだまだ未熟な催し物です。みなさまのお力添えとご協力なしには成り立ちません。最初から最後までいっしょに。今年もどうぞ、よろしくお願ひします。

第3回とうほく学生演劇祭実行委員会



## 1-6. 関連企画の実施

本年度の演劇祭では、数多くの番外企画を設けた。実施した企画の一覧とともに、その成果について簡単に記した。

### ○ 演劇祭説明会

「とうほく学生演劇祭」の参加団体説明会は毎年東北6県で行われる。出会って間もない実行委員が2人1組になり、各地へ訪問し、説明を行う。今年は参加問い合わせのなかった秋田をのぞく東北5県に加えて、新潟での説明も行った。説明会という旅は、実行委員同士の親睦を深める格好の機会でもあるが、なにより、各地の学生演劇の人と出会い、直接声を交わせることは他の何にも代えがたい経験である。とうほく学生演劇祭への参加団体を増やすべく、次年度以降はこれまで以上に各県に直接出歩くことを目指したい。



### ○ ENGAWA cafe

仙台の制作カンパニー、entoo が今年よりはじめた企画を、とうほく学生演劇祭の会期中にも行ってもらった。全団体観劇チケットであるidayパスを購入した観客にはドリンクチケットが配布されることや、祭りおみくじの登場など、とうほく学生演劇祭だからこそできる協同企画もおこなうことができ、演劇祭の『フェスティバル』感を生み出していた。



## ○ とうほく学生演劇祭ドラフト会議

京都学生演劇祭で例年行われている学生演劇祭ドラフト会議を参考に、今年初めての試みとして、全団体上演終了後の9月5日に行われた。5つの在仙劇団が参加し、とうほく学生演劇祭上演全作品を観劇した演出家や代表がその中の俳優、スタッフ、演出家、作家など全ての関係者から良かった個人を、プロ野球のドラフト会議の要領で指名していくという内容であったが、指名する側もされる側も大いに盛り上がった。指名終了後は、指名した劇団との交渉のために連絡先の交換などが自由に行われ、今後の仙台演劇界の底上げも期待できるような成果があったといえる。また、事前に各劇団に連絡を取ったところ多くの団体からの応答があり、仙台演劇界に対する、とうほく学生演劇祭の認知向上をはかることも、あわせて成果と言えるだろう。



## ○ せんだい観劇スタンプラリー

友人の出演するある1団体だけを観劇して他の団体は観劇しない、というような観客が多いことは毎年の課題で有り、その対策として立案されたのが「せんだい観劇スタンプラリー」である。卸町で行われた演劇公演4演目、ならびにとうほく学生演劇祭3を観劇すると景品が貰える、という仕組みで7月末から9月にかけておこなわれた。学生演劇のみならず一般の演劇公演も巻き込む力の入った企画だったが、とうほく学生演劇祭そのもの、あるいは他公演への集客に直接的につながったかは、疑問の余地が残った。





## ○ ときのへや

とうほく学生演劇祭および、全国学生演劇祭にて実施された学生団体の上演を演劇祭本番の合間に別部屋で上映した。中には4日間にわたる上映のすべてを鑑賞に訪れる人もおり、少ない人数ながら一定の成果を収めたように思う。会場の設えおよび、上演の形式などについては再考の余地があり、また、俯瞰の定点映像で収めた映像を長時間見つめることの限界も感じられた。これまで予算の都合から後回しになっていた映像によるアーカイブにも次年度以降力を入れていく必要があると強く感じた。



## ○ アカペラライブ

東北学院大学アカペラサークル reMix の協力を得て、9月3日の15時ころから、2バンドのライブがウッドデッキにて行われた。当日は天候も良く、参加団体や観客にとって安らぎのひとつとなった。バンドの出演者との交流の場があまり持てなかったことが残念ではあったが、他ジャンルとの横断的な交流の可能性も垣間見ることのできた、豊かな時間であった。



## ○ 講評会&閉会式

2時間近くにわたる審査の後、審査員による講評が行われた。大賞なし、という厳しい結果を受けた学生たちにむかって、真摯に誠実に、丁寧な言葉で話しかける審査員の姿が印象的で、学生達の中には涙を流すものもいた。



## ○ 交流会

毎年恒例の交流会は、今年も 10-BOX のウッドデッキで行われた。当日は天候にも恵まれ、スタッフや審査員も含めた40名近くの参加者が芋煮やちらし寿司に舌鼓を打ち、語らった。交流会後半には、審査員によるワークショップも急遽行われた。



## 2. クレジット

### ○ とうほく学生演劇祭3 実行委員会

実行委員長 佐藤立樹 (宮城教育大学)  
広報 清野友紀 (尚綱学院大学)  
広報 塩入望 (尚綱学院大学)  
広報／企画 村上京央子 (東北学院大学)  
企画／会計 成田柴野 (宮城教育大学)  
企画 古川真衣 (宮城学院大学)  
企画 白石桃子 (宮城大学)  
事務局 中村大地 (屋根裏ハイツ)

### ○ 共催

(公財) 宮城県文化振興財団

### ○ 協力

せんだい演劇工房 10-BOX  
entoo  
さんぴん  
青年団リンク キュイ  
劇団短距離男道ミサイル